

2024年度 大学評価統括本部 外部評価(意見交換会)レポート

2024年3月13日(木)、東洋大学白山キャンパスにおいて、「2024年度 大学評価統括本部における外部評価及び意見交換会」を実施した。

今回の意見交換会では、外部評価委員である檜山和男氏(中央大学副学長、理工学部教授、AI・データサイエンスセンター所長)と挽野元氏(アイロボットジャパン代表執行役員社長、経済同友会幹事)をお招きし、事前の書面評価結果をもとに講評を行っていただいた。

東洋大学からは矢口悦子学長を本部長とする、大学評価統括本部員が参加し、書面評価及び講評いただいた内容について、意見交換を行った。

○はじめに

意見交換会の開催にあたり、矢口本部長より、外部評価委員の両名に御礼が述べられた後、進行説明がなされ意見交換に入った。

○外部評価委員からの講評

自己点検・評価活動と中長期計画の推進について

- ・ 総合大学として整った内部質保証体系が構築され、「学生の成長を約束する」というスローガンのもと、教職協働で全学的な取り組みが進められている点は素晴らしい。
- ・ 内部質保証の体系は、学生を中心に考えて設計されており、優れたデザインとなっている。また、教職協働として、教職員がいわゆる上下関係にとらわれず、ピアとして学生のために協働していく姿勢は評価できる。継続的にPDCAを回すところもしっかり実践されており、インダストリーリーディング(業界を牽引する)な取り組みと評価できる。
- ・ 中長期計画のビジョンとして掲げる「未来を哲学する、東洋大学」は、建学の理念をもとにした東洋大学のユニークな立ち位置がハイライトされている。これからの時代、社会の変容、テクノロジーの発展が進むなかで、ヒューマニティの在り方や本質を問い続ける「哲学」はとても大事である。これは東洋大学の素晴らしい価値であり、この価値を学生や社会に理解してもらうことがとても大事である。
- ・ 中長期計画の6つの基本方針は、非常にバランスがよく、時代の要請に合致している。また、中期計画を推進するために教育力強化特別予算を設けている点も評価できる。
- ・ 先行き不透明な時代のなか、中長期計画を中期5年、長期10年のスパンで設計し、変化に柔軟に対応できるよう工夫されている点は優れている。
- ・ 学部・学科単位で5～10年といった中長期計画を策定している点は、他大学では容易にできることではなく、そこにチャレンジしている点に最も感銘を受けた。また、

学部・学科等の組織を支えるために、年3回の学長ヒアリングや学長からの提言(フィードバック)の体制を構築し、全学的に取り組んでいる点も素晴らしい。

- PDCA サイクルをいかに回すかポイントであり、形式的にならないよう注意が必要である。中期目標を達成するためには教職員の相当な労力が伴うところであり、そのためには教職員の考え方や意識を変えなければいけない。
- PDCA は大事なフレームワークであるが、PDCA を回すこと自体が目的になってしまいがちであり、学生のために本当にできているか、しっかりと中身や成果を見ていくことが大事である。学長のリーダーシップの下で PDCA を適切に回しつつ、OODA (Observe- Orient- Decide- Act) ループや AAR (Anticipation- Action- Reflection) といった現場視点でのマネジメント手法も活用することが望ましい。現場のニーズはどんどん変容していくので、ボトムアップやミドルアップの風土醸成が重要となる。
- 総合知教育は、社会の要請に応える革命的で素晴らしい試みであり、これを成功させることが重要である。一方で、定着には相当のエネルギーがかかるので、ポストプロジェクトマネジメントの視点から、継続的なフォローアップを行うことが望ましい。プロジェクトの進行に伴い、さまざまな問題点が出てくるので、適宜対応や修正を行うことが重要である。この取り組みは非常に意義深いものであり、引き続き応援したい。
- 兼任教員制度(2025年度以降は特命教員制度と呼称)について、社会課題を解決するためには多角的な視点が求められる。本制度を活用し、アカデミアと実業界のプロフェッショナルが協働することで、実社会で活躍できる人材の育成が期待される。この取り組みは極めて意義深く、感銘を受けた。

教育 DX 推進基本計画(計画①)について

- 全国の大学に先駆けてスマートアプリの導入や AI 活用など、教育 DX 推進を積極的に行っていることは素晴らしい。アプリはメニューが豊富であり、アイデンティティである哲学を大事にし、特に自己省察を促す My Journey 機能や AI によるフィードバックを返すなど、大変ユニークで優れた取り組みである。
- 落とし物サイトをはじめ、さまざまなデータを利活用することで DX を推進している点も評価できる。
- 学習アドバイザーの AI 活用など、新たな教育手法の構築も期待される。
- 学生の入学から卒業までのライブイベントに合わせた設計は素晴らしい。今の学生はデジタルネイティブであり、こういったデジタルツールを活かして入学式で学生との接点を持つことは、所属する喜び、この大学に入ってよかった、この大学に入って頑張ろうと思っていただける一つの儀式であり、とても素敵である。

- ・ 投稿ジャーニーのアイデアもとても良い。おそらく、最初は珍しくて利用されるが、徐々に利用率が下がってくるので、飽きさせない工夫が必要となる。例えば、授業の課題に関する悩みを教員に直接聞くよりも、コミュニティで聞いた方がより広い情報共有がされて、授業や課題に対するエンゲージメントが高まるのではないかな。
- ・ 学生数 3 万人、卒業生 36 万人という規模は、1 つの自治体くらいの規模感であり、この 1 大コミュニティを活性化させることができれば、36 万人の Learning Journey といった広がりが出て、リカレントやリスキリングの可能性も大きく広がると考えられる。
- ・ 「満足度」と「所属する喜び度」について触れたが、満足というのは良い言葉であるものの、私どもは社員満足度とは言わず、社員エンゲージメントと呼び、社員が会社に所属する喜びを持ち、モチベーションを高めることを重視している。学生がこの大学に所属してよかったと感じてもらえる仕掛けを作ることが望ましい。学生は子どもではないため、事細かに指導する必要はないが、相談事があれば必ず応じ、相談に乗れば何かヒントが掴めるような環境を整えることができるとよい。

教育 DX 推進基本計画(計画②)について

- ・ 総合知教育の推進にあたり、全学基盤教育科目、全学共通教育科目のオンライン化は良い試みであり、リカレント教育など社会貢献にもつながりを持つものとなる。たとえば、理系学生であっても決算書を読むことが求められるため、会計学を学ぶ必要があるなど、総合大学として多様な分野を有し、学生がそれを学べるようにしている点は素晴らしい。
- ・ 基礎科目はできるだけオンデマンド化し、何度も繰り返し学べるようにすることが学習到達目標の達成や基礎学力の向上につながり、重要であると認識している。東洋大学の総合知教育では多様な分野の科目が結集しているため、サブメジャー化などの施策も検討されるとよい。
- ・ 第 2 部を設けていることは素晴らしく、第 1 部との合同メディア授業は教育効果の面で有効な手段であると考えます。
- ・ オンライン教育のカリキュラム・ポリシーによるが、現在、働き方がオフィス、家、サードプレイスなど多様化しており、学生時代からどこでも学べる環境を整える意味でも、オンラインの単位認定科目開講数はさらに増やすことが望ましいと考える。開講数を増加させることで、卒業生も含めたリカレント教育やリスキリングの機会が広がり、貴学の教育力向上にもつながると考える。

〇おわりに

金子副本部長より、東洋大学への助言及び励ましの言葉に対して御礼が述べられ、内部質保証として、より一層教育の質向上や学習成果の向上に努め、社会に対して説明責任を果たすこと

を継続的、恒久的に取り組んでいくこと、また本学の価値を再認識し、創立者井上円了の理念を大きな柱に、教育・研究・社会貢献活動に取り組んでいくことが表明され、閉会の挨拶とした。

以 上